

## 魯韓踏雲録（承前）： 雜録

著者	矢津，昌永
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 3
ページ	3 1 - 4 2
発行年	1894-02-07
その他の言語のタイトル	魯韓踏雲録（承前）： 雜録
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4350">http://hdl.handle.net/2298/4350</a>

到着するや否や、忽ち數多の商人及物賣ひ等の群集するは別に東洋と異なる所あり十五日午後一時頃同所出帆し十六日午前七時頃エルバ嶋を左に臨み同日午後三時頃グノアに到着致候小生は茲にて船を下り直ちに停車場に至り午後六時四十五分發の急行列車にて出發致候マイランドに至りし頃は既に日は暮れ候はつきシユヴァイツ國の壯景を見るを得ざりしは實に遺憾に有之候然し當日は雨天に有之候ひし間晝間經過えても餘り違ひなかりしあらんと存候十七日午前七時頃には早や同國を經過し獨逸國に入り同午後六時半頃フランクフルト、アム、マイン府着茲にて五時間停車致候に付瀛車を下り散步を試み候同府は獨逸屈指の大都會あるにより市街は甚だ美麗に有之候特に同府の停車場は歐洲第一と稱せらるゝものにして其廣大あると諸事の整備せるは實に驚くべきものに候午後十一時十五分頃同所發の瀛車にて十八日午前十時半頃伯林府到着致候。

右は小生の道中の大略に御坐候急ぎ認め候につき不充分なる所もあり又讀み難き所も有之べくと存候御判讀被下度奉願候也謹言

明治二十七年一月

大瀨 甚 太 郎

龍南會々員諸賢御中

魯 韓 蹈 踏 雲 錄 (承 前)

助教授 矢 津 昌 永

八月二日、夙に起き出發の豫定あり、余の腹痛未だ止まず、僅に扶けて馬に上り、温井を發す、途、東萊府の郭外を過ぐ、府使代々の紀念碑……「府使某公万世不忘之碑」と題するもの、市端に建立すること少からず、聞く、府使交任する毎に、士民一々、之を建つ是れ眞に敬慕の誠意より出づるものにあら

ず、例の諂諛的、標識たるに過ぎずと云ふ、但紀念碑を建つるは、當府のみに限るに留らず、余等の過ぎたる所にては、府市は勿論、村落に於ても、多く見る所あり、左れば、朝鮮古慣の一流行物ある乎、又府中所々に、イヤに彩色したる小堂、荆叢の裏にあるを見る、之れを廟と云ふ、當國にては、廟に蠶廟、厚廟、瑩廟の別あり、蠶廟とは、諸神を祭るものにして、厲廟は、惡鬼を祭り、瑩廟は有徳の君子を祭る所ありと謂ふ、是れ只儀式的に止ると見へ、祠道草深くして人の吊ふもの、又孝子某碑、或は節婦某墳の如きも、往々、村市の端、叢深き所に於て見ることあり、所謂、門閭に旌表するものあらん、知らず韓の孝子節婦は、放尿累々の裏快く、瞑するや否

是より順路、古館、草梁を過ぐ、草梁村に於て、朝鮮の學校を見る、庭上に蓆を敷き、韓童十二三名、之に座し、各々『小學』を我が習字狀大の、字に書きたるを持し、教師句讀を教へ、或は暗誦するものあるを見たり、是れ韓人の所謂、教育法あり、而して『小學』は實に彼等が、理想上の徳義たるなり、之を過ぎれば、灣を隔て、遙に我釜山居留地の、雲壁の皎々たるを望む、數日來、韓民の茅屋、土壁を見とし後あるを以て、恰も大都會に入るの感あり、其愉快、實に謂ふべからず、遂に、大池の族亭に歸着し、一浴して、葡萄酒を傾く、其味格別あり、之、腹痛亦癒ゆ

農科大學助教授、津野慶太郎、同宿せりとて來訪せらる、氏は、曩に、余等着韓以前に、當港に着き、牛疫調査の爲め、洛東江を遡りて、密陽地方に赴き、一昨日、歸港し、明晚出港の東京丸にて、元山津に向ふと云ふ、是より於て、其同志を得たるを喜び、同行を約す、午後五時、室田總領事、山座法學士、川上書記生來訪せらる

本日、當地發行の『東亞貿易新聞』に、雞林旭光と題し、我々一行に關する、記事を掲げて曰く『帝國大

學助教津野慶太郎君は、牛疫源因取調の爲め、密陽地方に出張の所、一昨々日歸釜、又地理地質研究の爲め、來韓中の、第五高等中學校教官、矢津昌永君、及兵庫縣中學校長、小森慶助君と、相伴ひ、來る三日、當港出帆、海路元山へ出發の由あり』、と是れ我々の前途を悉くすものあり、故に茲に借用す、夜來雨あり

八月三日午前在宿當港の郵便電信局長、松村昇一氏、來訪せらる、午後、小學校長、武光氏、及内田訓導、來訪せらる、當國に關する、種々の調査、及教育に關する、事項を調査して惠する、蓋し、曾て委囑せし所なり

本夕、室田總領事より、余等三名、晚餐響應の招待あり、午後七時、招きに應じて、總領事館に至る、今茲に、總領事館に付記すべし、抑々、我總領事館は、釜山港中、第一景勝の地を占め、龍頭山麓、綠松の間、聖屋巍立し、旭旗飄々たるもの、則ち是なり、樓上より一望するときは、居留地の瓦屋、目睫の間、集り、釜山灣は、新月形を以て浸入し、金波激瀾、大小の漁船、帆船、爰に浮び、絶影嶋、五六嶋は、恰も泉池に浮べる、盆石の如し、又室内には、日本固有の諸美術品、及種々の裝飾品を陳列し、頗る愉快あり、嚙席に移れば、主人、室田、總領事、瀨川、山座、川上の諸氏、座にあり、酒間種々有益の談あり、今其一二を擧ぐれば

朝鮮國歩の衰退せる原因、は種々之れあるべし、雖ども、其主たるもの二あり、一は官吏の貪婪にして、下民を壓制することあり、當國は、上下の別、非常に嚴にして、兩班以上の人士は、下民を壓すること甚く、之れが爲め、卑屈風をなし、進取、改良の氣象なきのみか、地方官等の貪婪ある、治下の人民に、稍々富有の聞へるものは、部下の巡吏を使囑して、強て罪を構へ、若くは冤に陥れ、忽ち之れを

獄に下して、嚴刑に處す、只之を免るゝの法は、既に慣例あることなれば、家人等は、家産を傾け、官吏に賄賂を贈るの一法のみ、斯の如くあるを以て、人々勞力して、畜積することあることなれ、其一は、征韓の役、我兵の蹂躪、掠奪によるあり、此役也、前後七年に亘り、我兵及明兵の、韓地に入りしもの、無慮五十萬に過ぐ、到處、屠殺燒夷、財貨あれば悉く載せ歸れり、是に就き、一話あり、長曾我部氏の、富民洞を引き拂ふや、凡そ人民の一藝に能ある者は、皆載せ歸らんとす、是に於て、殘民等、哀願して曰く、公悉く我が能者を伴ひ歸る、吾々は只餓死あらんのみ、希くは吾々も伴ひ去れど、是を以て全村多く歸化せりと傳ふ、以て其一班を知るべしと、韓人は、獨り第二の原因を以て、貧弱の基とし、征韓に對しては、今に惡感を有すと云ふ

現今我日本人の居留地は、凡二百二十一年前、釜山より移せしものにして、輒近に至りて、居留人益々多く、狹隘を感ずるに至りてを以て、先年朝鮮政府に照會して、海面凡二萬坪を、日本人の手を以て、埋立てたり、是れ今の、入江町西南の地にして、殆ど我日本の所有地に異ならず、其他の土地も、無期限借地にして、之に向ては年々、五十圓の借料を拂へりと云ふ

其他雜談に刻を移し、充分に快を覺へ、又献酬に厭さしを以て、將に辭して歸らんとすれば、玄關には宿より迎ひの爲め來りて、東京丸の拔錨、既に迫れりと言ふ、驚て時辰を檢すをば、既に十一時を過ぐ、匆々宿に歸り行李を理めて、東京丸に乗組む、東京丸は、郵船會社の所有にして、一千三百餘噸の大船あり、一ヶ月凡そ二回、薩摩丸と交代にて、元山を経て、浦鹽斯德に定期往復するものあり

同船者は、余等三名、及第一國立銀行員、西川氏、元山貿易商(防殺事件委員)梶山新介、葭瀨忠次郎の兩氏あり、外に、他等の客は、日本人十三名、洋西人四名、露人三名、支那人七十一名、朝鮮人三十名とす、乗客は、

毎回支那人を以て、最も多とす、故に支那人は、郵船會社第一の花客ありと云ふ、十二時拔錨す、此夜月明に、甲板に出づれば、涼風衣を吹き、亦夏熱のあるを知らず、且つ海上は、對馬海流に沿ふを以て、海波特に平隱あり

八月四日、朝八十四度(熊本八十一度)、曉起して甲板に出づれば、船既に江原道の沖を走る、有名なる鏡嶺の脈は、蜿蜒として南東に走り、南、太白山に連る、多くは櫛木なき禿山にして、間々矮樹の生ずるを見る、概ね花崗岩より成るが如し、山脈は相駢列したるものにして、著しく秀拔の峰あり、最高二千尺より千二三百尺まであらん、地圖によれば、高きは王城山、大關嶺等あり

江原道は、風景の勝あること、全國の最たる由にて、濱海の山間には、待中台、望洋亭、叢石亭等、總て八ヶの名勝ありて、之を關東八景と稱す、山脈之急に海に迫り、海底頗る深きが如く、嶋嶼稀に、潮汐又甚だ少く、潮水清麗にして、名けて碧海と謂へり、大關嶺は、漢江の水源にして、其峽間は、舊來有名ある人參の產地ありしが、今は産額多からずと云ふ

海上は至て平穩あり、船員の言に、冬期の航海は、風波あれども、夏期は常に波を揚げずと云ふ、是れ對馬海流に沿ふて、馳するを以てならん、然れども温暖なる海流の爲め、屢々濃霧海面を掩ふて、航路辨せず、汽笛の警聲を聞くこと頻あり、斯の如く平穩の航海あるを以て、人々愉快に海上の眺望を領し、毎食時には、必ず食堂に出で、食卓一人の欠席者を見ず

八月五日、朝八十二度(熊本八十一度)、船既に威鏡道の沖にあり、將に永興灣に入らんとす、而えて、元山津ウツシヤンも亦遠からず、是に於て、上陸の用意を怠らず、元山の港口には、嶋嶼散點して、水路數條に別れ、間々暗礁あり、曩に、魯國軍艦は、暗礁の爲め沈没して、今は漸く烟突、檣頭の水面より現はるゝを見るのと、午

前七時、元山港内に投錨す、港内水深くして、大船も陸に近づくを得る良港あり、然れども、東京丸は、十二三町の所に止む、元山津は、後背に連岡を控へ、我居留地は、中央佳良の位地を占め、左は支那居留地にして、右は朝鮮人の茅屋の村あり、我居留地は、瓦屋白壁凡そ一百戸、藁を駢べて并列せり、將に上陸せんとすれば、細雨霏々として至る、聞く、當地は、既に數日來の降雨に之て、陰濕特に甚し、蓋し、此地の梅雨期ありと云ふ、故に細雨濛々と之て、密雲空を掩ふ、釜山にては、旱魃四十日に及び、而して此地は、陰雨連日とは、厩かの所にて、異なるものかな、直に上陸、福島屋に投す、朝飯を終りて、領事館を訪ふ

領事館は、居留地の北、山に據りて在り、副領事、中川恒次郎氏、并に大木中村の兩氏に面會し、種々要件を委嘱して、正午、歸宿す、今中川領事の、當港に關する、談話一二件を記すべし

當港は、明治十二年八月の、開港豫約により、我國の爲め、開港したるものにして、今居留民七百名あり、支那人は三戸に過ぎず、貿易は、二十二年、防穀令以來、活潑ならず、是れ當港は、米穀輸出を主とすれば、第一に其害を被りたる所以なり、其他の輸出品は、牛皮、明太、海鼠、海草、烟草等なり、其内、牛皮は、日本に輸入すれども、其他は、概ね朝鮮の各港に輸入す、特に明太は、元山、北青近海ボクラエンに於て、夥く捕獲する、一種の魚類にして、之を乾して、慶尙、全羅に送り、韓民の儀式的、食膳には、必ず之を供ふるものあり

教育は、本願寺僧侶の手にあり、共立小學校一個あり、我居留民の、子弟を教育す、生徒六十名、學齡兒童と、大略就學すと云ふ

茲に元山津に就き、記する所あるべし、當港の位置は、北緯三十七度二十八分三十秒にして、陸中及

羽後の南端と、其緯度を同ふすれども、其氣候に至りては、寒暑の懸隔すること、釜山よりも一層甚し。是れ亞細亞内地に近づくによるなり、左に其寒暖の度を示すべし

明治十九年		全二十年		全二十一年		全二十二年	
二月	零下十四度	零下四度	零下十度	零下九度			
七月	三十四度七	三十四度	三十四度六	三十四度八			

斯の如くあるを以て、咸鏡、江原兩道の沿岸、海面は、冬期氷結し、港を鎖すに至る

居留地内には、郵船會社、郵便局、警察署、第一及第二百銀行支店、及公園地の設けあり、公園地は、租界の南部にあり、園中に、雲母片岩、露出の巉岩ありて、頗る風致に富む、岩頂に、天照大神を祭る、園内には、高麗松多く、韓人は之を柏と云ふ、楓類、及楊等之に次で多し、楓は、其類多く、葉の大あるものは、羽扇を欺くものあり、且つ樹幹も數抱に及ぶものあり

地質は概ね、結晶岩に属し、雲母片岩最も多く、輝綠岩、石灰岩等、之に次ぐ其走向は、北西より南東に走るを見る、而して北部、滿州境に至るに従ひ、漸次、高度を増し、遂に白頭山の高峰とある、白頭山は、鴨綠、豆滿、松花江の三大江の水源にして、英人ヨングハスバンド氏等の、探險によれば、四圍尖峰を以て繞らし、其中心には、周回四里三十町の火口湖ありて、頂上は、海拔七千五百尺ありと云ふ、其四近は、一般に火山岩よして、岩中に玄武岩あり、故に白頭山は、全く消火山なりと云へり

咸鏡道は、朝鮮最北の一道よして、元良哈(魯領)に境し、道中の咸興府は、現王室ある、李氏、基業の地にして、朝鮮にありては、人質懔懔を以て聞ゆ、今の元山津は、古の永興にして、壬辰の役、清正の安城



(安邊)より、來り攻むるや、二王子既に逃れて、境城にありと聞き、鍋嶋、相良の兩將を留めて、永興を守らしめ、自ら輕兵を卒ゐて、鎭嶺に至り、韓克鉞と、海汀倉と戰ひ、大霧に乗じ、掩撃えて、克鉞を擒にし、進んで鏡城に至れば、二王子既に、會寧府に逃れ去るを以て、馳せて會寧府に至り、遂に二王子を擒すと、傳ふる所、歷々本道の中にあり

此夜、汽船の出港は、明後七日午前六時に、延期せしを報ず、蓋し降雨暫時も止まず、且つ風伯之に乗じて、船中の荷物、陸揚げを得ざるを以てあり、併し之れが爲め、氣温大に降り、午後二時に於て、七十八度に過ぎざりし

八月六日、曉來雨脚未だ止まず、朝七時に於て、七十四度に過ぎず、少しく峭料を覺へ、遽に秋冷の襲ひ來りし之感あり街上の、寂寥特に甚し、津野氏は、當港及此近傍に於て、調査の廉あるを以て、浦鹽行を止め、余等の歸途まで、當港に滞在することに決し、第百二銀行支店に、轉寓す

當港まで同船きたる、本港紳商 梶山新介氏、來訪せらる、氏は防穀令、被害運動委員にして、又被害の最も大なるものなり、今般償還金一件に付、我政府に請ふ所ありて、上京せりと云ふ、氏の言に、防穀令によりて、我商人の損害は意外に夥しく、直接に三十二萬八千圓なりと算定す若し間接の損害を加ふるときは、蓋し五十萬圓及ぶべしとなり、氏は久しく、朝鮮貿易商たりし、經驗よりして、曰く、日本人は、最も朝鮮貿易に適當せり、何となれば、我國民の性質として、歐米に向はんよりは、先づ寧ろ朝鮮貿易に従事し、貿易の懸引を悉知すべし、特に墮に一葦水を隔つる所なれば、假令、郷土に戀々たる、我邦人にてても、此地に渡來することは、格別難しとせざるべし、又朝鮮によりて、我國益をなすことは實に夥し、現に、我國民の駐在するものにてても、常に壹萬人に下らず而して、之れが資本金は、

五百萬乃至八百萬圓にして、之れに對する收得少なからず、且つ日本漁民の、朝鮮沿海の漁獵に従事するもの、又一萬人、而して其漁額、蓋し一百五十萬圓に軼ぐべし、彼れ是れを合すれば、朝鮮の我國を利するものと、少なからざるを知るべし、外交上、豈に之を度外視すべけんや、云々、其他、雜誌刻を移し、當港貿易に關する、調査の材料書類を貸與せらる。

朝來宿にありて、樓上より望むに、釜山と同じく、韓人の行商少からず、皆な日本語の觸れ聲を放てども、殆ど其意を解する能はず、釜山とは觸れ様も異なり、聞く朝鮮人は、慶尙、全羅邊と、此の咸鏡とは、言語大に異なりと、余等外人の、聞く所に於ても、亦稍々異なるを覺ゆ、例へば釜山にては、船をペーと稱し、元山にては、ペーと云ふが如く、總て去聲なるが如し、此日細雨終日止まず、街上行人稀に、時々白衣の韓人、帽上に異形の油紙製の笠を戴き、來往するの狀は、古風とや謂はん、閑雅とや謂はん、奈良朝以前の風俗の忍ばれて、「イト」面白し。

東京丸は、明早朝、烏港に向け、出帆の豫定なるを以て、此晚本船に乘組むことに決し、午后五時、晚餐を了り、小森氏と共に、津野氏の寓所なる百二銀行に至る、既にして、中川副領事來訪せらる、領事は、余等の寓所、福嶋屋を訪はれたれども、既に出立後なりしと云ふ、是に於て、行李を津野氏の寓所に托し、再會を約して相別れ、途、梶山氏を訪ふ、氏は船中用とて、麥酒數罍を惠まる、直に本船に乘組む、時午后八時なり、此夜一天既に晴れ、星斗爛々夜涼頗る快なり。

八月七日、朝七十八度、(八十度)曉起して曠望を取れば、右舷は茫々として、際涯を見ざる日本海にして、水天一碧、波驚かず、左舷は近く咸鏡の沿岸を望む、後背を擁するは屏の如き、鎭嶺にして、翠峰青巒の裏、聖壁の皎々たるは、是れ元山津なり、眞に是れ一幅の活山水に異ならず、是れまで見たる、朝鮮

の山峰は禿山にして、或は岩骨露れ、頗る殺風景なりしが、元山近傍は、總て緑を以て掩はれ、間々森林あるを見る、是れ全く、地質の異なるによるべし、然れども、多く峻嶒にして、傾度二十七八度より、或は四十度にも及ぶ所あるべし、咸鏡の山は、一見、其相を異にし、寒帶に類するを知り得べし

彼れ是れと、視察の中、正六時に及び、船は運轉を始めたり、本船は速力十裡餘、浦鹽までは三百二十三裡、凡そ三十時間を以て達すと云ふ、當港より、曩に沈没したる魯艦の水兵十一名、及士官一名、東京丸に乘組めり、前十一時、海面霧生ず、數々汽笛を吹いて進む、既まえて、霧亦霽る、鏡城并に元良哈地方の群峰は起伏して、怒濤の如し、是れ文祿の役、藤肥州の北征まて爰に抵り、遙み岳を望み、懷郷の情に、思はず士卒をして襟を濕さしめ、所なり、抑々、當地は釜山を距る四千七百韓里、氣候寒烈、禽獸風土、亦其趣を異にす、英雄も爰に至りて、豈に一滴の涙なからんや、余等、今は汽船に眠り坐から之を見み、轉た今昔の情に堪へざりしあり

午後、豆滿江（或は圖們江に作る）吐口の邊を過ぐ、豆滿江の海口は、別れて兩派とあり、鹿島と稱する三稜洲を抱いて、海に入る、此島は、元と韓領なりしが、明治廿四年の頃、魯西亞は、之を占領したりとて、一時、世界の注意を惹き、世間の談柄となりしものあり、今聞く所によれば、既に、純然たる魯領に歸し了れりと云ふ

強國と弱國と、境界相密接するの結果は、尙ほ之れに止まらず、他に種々の現象を認め得べし、朝鮮咸鏡道北部と魯領との間には、兩國交渉事件少なからず、元來、魯國が朝鮮の北境より、漸次又手を着けて、南下せんとするは、蔽ふべからざる事實にして、其韓北より南侵する、第一の策略とまて、圖們江涯の、韓民を自國に懷け、遂に魯化せしむる策の、實地に行はれ始めしは、今より二十八年前、朝鮮の

夫、饑饉の時あり、當時、魯領接近の韓民は、生活の道に就かんことを求め、争ふて國境を踰へて、西伯利に入り込みしが、其時は、恰も魯國が、滿州沿岸地方を收め、専ら開墾の策を、畫するの際なりしかば、彼等を魯化せしむる政策を、實行せしむるは、此時にありとし、ユルサコフ、プスロフカ近傍、肥沃の地を與へて、農具、牛馬等をも貸與し、以て生業を得せしめたり、此に於て、饑饉の韓民等は、相率ゐて、魯領より走り、爲めに咸鏡北部は、著しく人烟を減せり、抑々、咸鏡道の北部は、韓の極北境にして、氣候寒烈、地味礪确にして、生計よりは最も困難なるより、一たび生活に易き、地を得ては、再び歸ることを忘れ、加ふるに、北境の韓民等は、天然風土の然らしむる所、人質慄悍にして、魯民に似たる所より、魯領に投じたる韓民等は、魯民と厚く親和玄、現今、朝鮮接近にある、一萬有餘の韓民等は、大概、殆ど魯國に歸化せしの有様なり、今日余等の浦邊四近に於て、見る所によろも、洋裝、斷髪にして、帽を戴き、其容貌の、酷だ日本人に似たる人士の、徘徊するを見て、怪て之を叩けば、是れ則韓人の魯國に歸化したる者ありと云ふ。

而して、魯國の政策は、尙ほ之に止まらず、他の一方には、魯人が種々の物品を携へて、毎年、朝鮮北境に入りて、頻りに、韓民と通商し、次第に、韓民の歡心を收め來れり、斯くて、魯國南下の策は、着々歩を進めて怠らず、朝鮮政府に於ては、疾くより此事の、大害なるを憂ひ、北方の地方官よりは、武勇の人物を撰任し、國民の魯領に走るものを防制し、嚴罰を科せり、既に此程のことありき、魯領に在りて、千餘人の者、歸國するや、地方官は、直に之を虐殺せたるが、中一人、僅に遁れて魯領に走り、魯國地方官に訴へたるに、朝鮮地方官の、所置は、大に魯國南下の策に、防害あるを以て、直に京城の魯國公使館に移牒し、魯國公使、ドミトレブスキー氏は、將に、外務督辦に向つて、嚴重の談判に及ぶと云ふ、豈

よ奇象あらすや

晚餐後、露國の水兵等、甲板上に於て、樂器を弄し、唱歌の連唱を始む、其意を解せずと雖ども、始め其兩三曲を、謹唱するを見れば、想ふに、國帝の萬歳を祝し、國家の隆盛を祈るものあらん、嗚呼、彼等が忠君愛國の、赤心を涵養する素ありと謂べし、唱歌了れば、各々初めて笑顔を開て、舞踏を始む、其藝の巧拙は、全く躰と足とにあるが如し、而して中にも重もあるは、足の踏み方なり、兩手は背後に組みて、眼は遠所に着け、胸郭腹部は、前方に突出して足踏とす、一人了れば、直に一人之に代り、斯の如きもの數次にして、四人舞踏とある、内に日本婦人（醜業婦あらん）一人を加ふ、一高一低、其曲頗る妙あり、之を觀る爲め、船客盡く集る、英人あり、米人あり、魯人あり、支那人あり、韓人あり、其容貌より、躰格服裝に至るまで、各々異あり、之を見る方、却て奇觀なり、而して、最も余の感呼びしものは、日本人の矮小あることあり、何れの國人に比するも、概して短身あり、斯の如くして止まざれば、遂に、世界矮人の名を、博するに至らん、知らず大陸の山水、人躰に影響するや、否や、日暮を踏舞亦止む、即ち室に入り麥酒を傾け、日本海中、華胥の郷に遊ぶ

（未完）

## 文苑

### 和氣清麿論

梧園

笠間益三

孝謙帝寵遇妖僧道鏡、遂崇爲法王、大臣百官、拜趨於其下、殆如君臣然、又有阿諛之臣、希帝旨、佞道鏡意、發妖言、以動之、於是帝決意禪位、道鏡決意篡位、其危如一髮挽千鈞、當此